

遠江・山と里の民俗

会報 第003号



屏ヶ崖で行われた柴本組の「遠州大念佛」

遠州のお盆

遠州大念佛結句
80周年記念誌より

昔から祝い事やおめでたいことが重なったときに、「盆と正月が一緒にやってきた」といい表すほど、「お盆」は正月と並んで数多い年中行事の中で最も広く民間に親しまれてきた行事の一つである。

一般には七月（あるいは月遅れの八月）の十三日～十五日に祖先の霊を迎えて供養を捧げる習わしである。その最初に迎えるお盆が「初盆」である。初盆は全国各地でも行われる行事であるが、遠州地方の初盆はかなり特徴的といわれている。他の地域では初盆も通常のお盆もその執り行い方はほとんど同じに對し、遠州地方では初盆を殊更賑々しく行うのである。

他の地方では、精霊棚やお供物だけでしめやかに行うが、遠州では華やかに祭壇を設けて新仏をお迎えする。初盆を迎えたお宅を供養のため訪れる盆供養も、他の地域では親類縁者など内輪で行うのが通例である。しかし、遠州地方では、親類や友人はもちろん、仕事上の関係者など多くの人たちが参列する。さらに、これが年輩者から若い世代へと引き継がれ、若者たちもごく自然に盆切に出かける。実際、お盆の時期には黒服姿のサラリーマンが数多く見られる



し、盆供養に出かける車で道路も「お盆渋滞」と稱される程の夏の風物詩となつていゝ。そして、初盆を迎えた家々では遠州大念佛が行われる。

遠州大念佛の源流を探る

遠州大念佛の創始については二つの源流がある。

一つは「虫送り」である。虫送りは農作物の障害となる害虫を駆除する行事である。元龜三年(1567)十二月の三方ヶ原の戦いで徳川方の謀った布橋の奇計にかかって屏ヶ崖で戦死した武田軍の兵士の霊を鎮めるために始まったものと伝えられている。その戦死者の霊がイナゴと成って田畑を食い荒らした。

家康は三河から宗円という僧を招いて、屏ヶ崖のほとりて亡

霊供養のため大念佛を行わせた。二つ目は「雨乞い」である。讃岐の国守であった菅公が仁和年間(895～905)に日照り続きの時、城山の神に祈願をしたのが念佛踊りの起源で、遠州に流れてきた行事である。

布橋の不思議

遠州大念佛の起源の問題で他にあまりみられない布橋の奇計がある。三方ヶ原戦いの折、屏ヶ崖に白い布をかけて橋のようにみせかけ、これを見誤った武田軍が次々と谷底へ落ちて死んだという伝承である。しかしながら、現実には考えられないことなので、このことは何を意味しているのか。

布橋という名称から連想されるのは、越中立山で3年毎秋彼岸中日に女性の極楽往生を願って行なわれる布橋渡頂会である。橋を渡ることによって往生が約束されると説かれたのである。

すなわち立山の布橋渡頂会は、生前中に一度死んだことにして罪穢をおとせば、再生して健康と長寿がえられ、死後地獄に落ちないという再生信仰の生まれ清まりの儀式とか甦死再生儀礼ともいわれるものである。100年後の子どもたちに、歴史と伝統のもとで地域の文化・自然遺産を伝える公益社団法人日本ユネスコ協会連盟の第3回「プロジェクト未来遺産」に登録された。

布橋と「花祭り」

布橋は立山の他に奥三河の花祭にもなる。「白山行事」にもみられる。早川孝太郎氏の名著「花祭」によれば、七年目ごとに「白山」という方形の建物を畑の中に建てる。高さは三間から三間半、大きさは二間から二間半あり、屋根はなく、四壁はすべて青柴を束ねて葺き固い、これに無数の白色の御幣が押し飾ってあった。内部には二尺ほどの高さの床があり、床の下にも青柴の束を敷き並べてあり床の上には白色の木綿が敷かれてあった。天井の中央部分から梵天が吊り下げられていて、これを中心として四方に青・赤・黄・黒・白の五色の布が張り渡されていった。これを五色の雲とも呼んだ。さらに十二個の竜や神道、善の綱などが添えられた。四方に入口が設けられていたが、この入口の一方に扉がつき、神楽宿の舞戸（神楽を舞う所）に連結していた。この橋は俵を積んで橋枕とし、その上に板を渡し、さらに白木綿を敷いたものであったことから、まさしく「布橋」であった。そしてこの橋は、この世とあの世とを繋ぐ道と考えられていて、立山の布橋灌頂会と同様、罪業深い者は、この橋を渡ることで出来ずに転落すると信じられていた。

布橋を渡って「白山」に入ることを「浄土入り」といい、白装束に籠笠や扇子笠をかぶって顔をかきし、五色の花をつけた杖を持った姿で入ったという。この時「白山」の内部は黄泉の世界と考えられていた。この「白山」に入ることは黄泉の世界への旅立の仕度であったという。入って席につくと飯と茶が出されるが、飯は枕飯とい、「下黒川の花祭り」では握り飯に箸が一本さしてあったという。やがて四方の入口から五色の鬼が現れて天井の中央から吊り下げられていた梵天を切り落とすが、その間「白山」に籠っている人達は、あまりの恐ろしさに心も空になって枕飯が喉に通らぬ人もいたという。

このように布橋を渡って「白山」に入ることは、生きながらにして死者の世界に入って一度死ぬことを意味しており、「白山」から再び布橋を渡って帰ってくることで生まれ代わる。この行事で注目すべきことは「白山」から出て舞戸に帰って「よなふねをこぐこと」をしたという。

この所作は橋枕にした俵を背負い、両端に一本ずつ扇子を持ち、さらに口に一本くわえて船を漕ぐ真似をするもので、両端にあてた扇子は翼で、口にくわえたのは稲穂の意だという。白山に籠もって生まれ清まり再生することは、単に個人の儀礼にとどまらず、共同体にとって豊穡をもたらすものであったのではないかという。

芸能文化をつなぐ子ども達



川合の花の舞



滝沢の辰歌謡



横尾歌舞伎

浜松市市制記念日の立役者

横尾歌舞伎文化財少年団

石塚 萌(中一)

私は、市制記念式出演に向けて思いが三つありました。一つ目は、私達がやったお話「三人吉三」は、去年の秋の定期公演と同じ演目なので、去年よりもレベルアップした演技にしよう、練習しました。皆で集まりいい演技ができるよう何度も話し合いました。

二つ目は、いつもの舞台の大きさに比べて大きく、人が多く入る客席を見て、驚きました。しかも、こんな多くの人の前でやるのは、初めてでした。そして、出番までの間、緊張と不安でいっぱいでした。でも、舞台に立つと、緊張がやわらぎなんとかできました。終わると多くの人々がほめてくださり、とてもうれしかったです。私にとって良い思い出と経験ができて良かったです。

横尾歌舞伎文化財少年団

富田 咲夢(中一)

初めて立った大舞台。みんな真剣な顔をしていました。「大丈夫、絶対成功させようね！」みんな、笑顔で顔を合わせました。

今日は、浜松市市制記念日でアクトに来ていました。私の住む町横尾には、昔から受けつがれてきた横尾歌舞伎があります。それをお客さんに見てもらおうことになりました。今日のために一生懸命練習を重ねてきました。師匠さんに教えてもらった事を繰り返しながら仲間と一緒に作り上げてきました。頭の中で練習をして、いざ本番。

三つ目は、横尾歌舞伎の歴史です。この横尾歌舞伎は、大切な文化財であり、二百年以上も続く、素晴らしい伝統です。私達が地域に貢献し、素晴らしい伝統を守っていきたいです。

横尾歌舞伎文化財少年団
氏原 吉野(中一)

「七月一日」この日は私たちがアクトのホールに立っていました。市制記念公演の出演者の一人として舞台に立っていたのです。アクトホールの舞台は、とても大きく、私はこんな大きな所

で歌舞伎をやるんだな」と思いました。そしてこの日のためにがんばって練習してきたんだなと感じました。本番はとても緊張しましたが無事失敗もなく成功させることができました。今回の公演で多くの事を学ぶことができました。またこのような機会があったらぜひ、参加できたらと思います。

大きな拍手と自分にあたるスポットライト、会場から呼び声がか聞こえ、花せんも投げ込まれました。そしてあつという間に幕がおりました。この舞台を通し、自信も持てたし、いい経験ができました。この機会に感謝します。

呉松の大念仏

呉松の大念仏は、遠州大念仏の他の組と異なり、いたずらに華美に流れることなく、素朴ながら供養の精神にあふれ、荘厳な趣を湛えている。かつて後継者不足により途絶えましたが地域を取り組みにより復活し、大切に引き継がれている。

月遅れの盆の13日には初盆を迎えられる家に伺い大念仏を奉納する。念仏と歌枕を唱和した後、「アラッサー」の音頭で高唱念仏が始まり、お囃子がこれに唱和する。今年5軒の家に訪問した。家では、盆飾りをして親戚の人が集まり大念仏を迎える。



◆ 8月15日（金）西区庄内町の宿蓮寺で檀家と新盆の人たちが集まり、寺施餓鬼の前に「呉松の大念仏」が披露されました。



初盆を迎えた家の霊を慰めるために踊られる遠州大念仏のうち、庄内地区に伝わる「呉松の大念仏」（県指定無形民俗文化財）は、昔からの形式が引き継がれ、素朴ながら大念仏供養本来の気持が胸に響く。組を先導する頭先（かしらさき）と最後尾の後押しが羽織と袴を着用し、他の人は紋付の黒い着物に黒の三尺帯をまどって頭に手拭いをかぶり菅笠（すげがさ）をつけ、20人ほどが隊列を組みます。双盤（そうばん）や太鼓、笛などの楽器を用いて道囃子を奏しながら、境内に入る。



「花祭り」と念仏踊りの競演

浜北区高畑の遠州大念仏保存会「高畑組」は、九月十四日に長野県阿南町で開かれた「花祭り」と念仏踊りの競演」に出演し、民俗芸能の三遠南信交流を深めてきた。

同イベントは民俗芸能の宝庫・三遠南信地域を結ぶ国道151号が愛称「祭り街道」と命名されて十五周年を迎えたことや、「和合の念仏踊り」（阿南町）が今春、国の重要無形民俗文化財に指定されたことを記念して開かれた。静岡からは遠州大念仏（浜松市指定無形民俗文化財）が出ることになり、高畑組に出演をお願いした。



遠州大念仏（高畑組）



和合の念仏踊り



花祭り（豊根村）



花祭り（東栄町）

浜北から約三十人が出演し和合の念仏踊りや「花祭り」（愛知県東栄町など）の民俗芸能団体と共に、記念のステージを務めてきた。

これからの民俗芸能日程

日時	文化財名称	所在地	指定区分
1月1・4日午前	滝沢のおくない	北区滝沢町	国選択
1月3日午後2時	寺野のひよんどり	北区引佐町	国指定
1月3日午後1時	懐山のおくない	天竜区懐山	国指定
1月4日午後6時	川名のひよんどり	北区引佐町	国指定
1月4日午後1時	神澤のおくない	天竜区神沢	
1月中旬の午後1時	百万遍念仏と念仏満	北区細江町	市指定
1月第3日曜日	雄踏歌舞伎「万人講」	西区雄踏町	
2月1日午後6時	東久留女木の万歳樂	北区引佐町	
3月8日(旧暦1月18日月の出)	西浦の田楽	天竜区水窪町	国指定
5月5日午後6時	犬居つなん曳き	天竜区春野町堀之内	



東京で「やらまいか交流会」 民俗芸能をPR



会場インタビューに答える前崎会長(昨年の様子)

浜松出身者が東京近辺でがんばっている人たちが、年に一度ふるさと見訪める事業として浜松市が「やらまいか交流会」を開催している。

始めに市長の行政報告会があり、会場を空けて大交流会が開かれる。浜松市の行政や観光・地域団体が各ブースで活動内容などを展示発表をして東京にいる浜松人にPRをした。

無形民俗文化財保護団体連絡会も会長自ら、浜松にはこんななたくさんの民俗芸能があるんですよとPRした。

■あとがき

今回、副会長の瀧美位茂氏の資料提供により「遠州大念仏」を大きく紹介することができました。一連の発行事が現在でも六十数団体によって行なわれていることは、全国的に見ても他に例を見ないことであると思います。伝承されている間に、土地によって様々な変貌をとげながら行われていくようです。装束や振りに特色を出しながら、時には相互に競い合いながら演ずることが大念仏のエネルギーになっていくことが特色です。次号は冬の行事を特集しようと思えます。取材に協力をお願いします。(米)

横尾歌舞伎が関東ブロック芸能大会に参加



9月28日(日)東京板橋区で行われた第56回関東ブロック民俗芸能大会(東京都教育委員会主催)に横尾歌舞伎保存会が出演した。

保存会若手が演じる「菅原伝授手習鑑 車曳きの場」を上演し、浜松の民俗芸能の素晴らしさを東京でPRすることができた。

本大会には、前項でも紹介した長野県阿南町の「和合の念仏踊り」も出演し、あらためて三遠南信地域が民俗芸能の宝庫であることを示しました。